

共通体育武道系種目プロジェクト研究報告(2)

堀出知里¹⁾, 鍋山隆弘²⁾, 坂本道人¹⁾, 成瀬和弥¹⁾, 小俣幸嗣²⁾

1. はじめに

本報告の目的は、共通体育「剣道」受講生を事例として、大学での体育授業における心と体の学びの内容を検討することである。

学生が自らの経験に即して発した言葉は、教える側の関心に十分応えうる豊かな情報を含んでいる。しかし、言葉や語りといった質的データの分析と解釈は、厳密さを追求するとたいへんな手間がかかり、「労多くして益少なし」と感じることも否めない。とはいうものの、学生の言葉の中には、授業改善に活用できる情報が豊かに含まれており、活用するに値する貴重な資料といえる。

そこで本報告では、簡易な方法でデータを分析し、体育授業における心と体の学びについての仮説を得るといった試みを通して、言葉のデータを活用することの意義を考えたい。

2. 方法

平成17年度筑波大学共通科目「体育」(必修科目・通年実技)において「剣道」を受講した学生を対象として、1学期、2学期、3学期の各学期最終回に、質問紙調査を実施した。調査に用いた質問紙は、「授業を通して剣道に接してきたあなた自身を“心”と“体”の観点からふりかえり、授業を通して会得したと思うことを、思いつくままに書いてください。(できるだけ簡潔に。箇条書きでお願いします。)」という教示文に、「心」と「体」それぞれ

10の記述欄を付した。すべての調査への協力を得られた88名のデータを分析の対象とし、KJ法を援用してデータの解釈を行った。

KJ法とは、断片的なデータからアイデアをまとめる方法のひとつであり、川喜田二郎氏が考案した発想法である。KJ法には本来厳密な手順があるが、今回は簡素化した手順で作業した。1)学期別に回答用紙を分ける。2)回答が記入された調査用紙を記述欄で切り離しカード化する(その際、心の観点と体の観点をカードは分けておく)。3)模造紙の上にカードを並べ、直観で意味が近いと感じられるカードを寄せてまとめ、整理する。4)ある程度まとまったら、カードを糊で貼り付ける。5)グループを線で囲み、小見出しを付ける。6)全体を見て、再度検討し、納得がいくまで修正する。7)各学期の分析結果を比較したうえで全体を集約し、概念図に表す。8)作業全体をふりかえり、総合的に検討したうえで、心と体の学びについての仮説をまとめる。

3. 結果と考察

3-1 概念図を導く過程から

概念図を図1に示した。図1では、学期別の作業結果を比較し、意味が近いと感じられるまとまりを統合し、それぞれが含意するところをうまく表した小見出しをつけ、さらに相互関係を円の配置として表現した。太い実線で囲んだ小見出し「落ち着き穏やかな心を得た」、「集中して取り組めるようになった」、「学ぶ姿勢が変わった」、「礼節を学んだ」、「忍耐力がついた」、「体力」、「筋力」、

1) 筑波大学体育センター

2) 筑波大学人間総合科学研究科

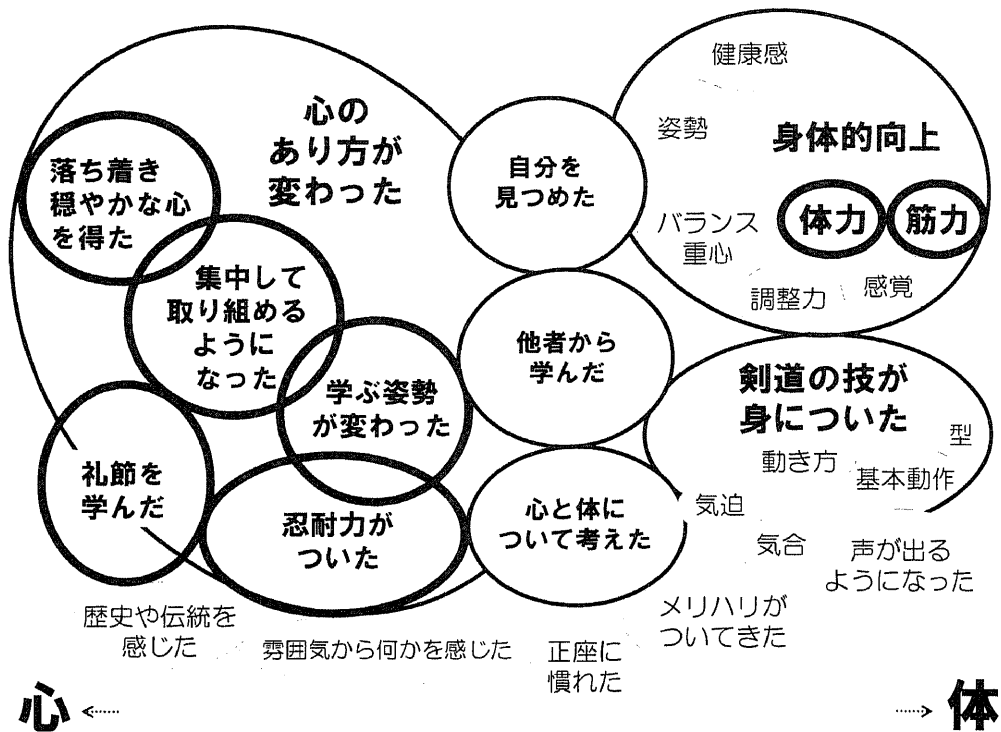


図1 「剣道」における心と体の学びの概念図

は、全ての学期において多数のカードが属する大きなまとまりとなり、目立つ存在となった。

3-1-1 心の観点からみた学び

心の観点からみた学びは「心のあり方が変わった」と大きくまとめ、「落ち着いた穏やかな心を得た」、「集中して取り組めるようになった」、「学ぶ姿勢が変わった」、「礼節を学んだ」、「忍耐力がついた」といった内容を含意するものと解釈した。「学ぶ姿勢が変わった」は、「積極的に取り組む」、「勇気を出す」、「真剣に取り組む」、「素直に向き合う」、「初心や基本にかえる」、「意欲的に取り組む」、「向上心を持つ」、「気力を出す」、「他者に教えを請う」、「あきらめずやり通す」、の小グループを含む。また、「あきらめずやり通す」の小グループは、「忍耐力」と「学ぶ姿勢が変わった」に共通して属するものとした。

3-1-2 体の観点からみた学び

体の観点からみた学びは、「身体的向上」と「剣道の技術が身についた」の二つに大きくまとめた。「身体的向上」というまとまりは、「体力」、「筋力」、「健康感」、「姿勢」、「バランス・重心」、「調整力」、「感覚」の向上を含意するものと解釈した。また、「剣道の技術が身についた」というまとまりは、「基本動作」、「型」、「動き方」を含意し、「気合い」、「気迫」、「声を出すこと」も部分的に含むものと解釈した。

3-1-3 心と体をつなぐもの

心の観点、体の観点の両者において、カードに記載された具体的な記述の内容は異なるものの、小見出しのレベルではほぼ同義と理解できるグループがあった。それらを統合して、小見出しを「自分を見つめた」、「他者から学んだ」、「心と体について考えた」、と

し、概念図では両者の中央部に配置した。

3-1-4 他者から学びとる

「他者から学んだ」について、1学期は指導者(教員)との関係が中心であった。具体的には、「指導者への敬意」、「指導者への感謝」、「指導者も学ぶ者に礼を忘れない」などであり、指導者以外の他者についての記述は少数であった。一方、2学期以降は、「指導者」、「先生」など、相手を指導者と特定した記述がみられなくなり、3学期には「相手が何を考えているか考える」、「待つ」、「見る」、「観察力」、「相手に対する心持ち」、「協調性」、「気配り」、「思いやり」、など、共に学ぶ仲間としての他者の存在を前提とした学びが多く指摘されていた。

これらのことから、1学期は教員の直接指導の影響力が非常に大きく、受講生は教員の姿を見て学びとることが中心であったが、次第に受講生同士がお互いを見て学び合うようになっていく様子を読み取ることができた。

3-1-5 忍耐力と心の姿勢

「忍耐力がついた」は、全ての学期において目立つグループであったが、2学期以降は記述内容の質に変化が見られた。「忍耐力がついた」に含まれる「あきらめずやり通す」という小見出しでくくられる記述に注目すると、1学期には少数であったが、2学期、3学期には「克己心を持つ」、「続けるという気持ちを持つ」などの小グループを含んで拡大し、「学ぶ姿勢が変わった」と関連するようになった。

これらのことから、受講生が剣道を通して学んだ忍耐とは、身体的な苦痛に耐える力そのものでもあるが、一方で苦しい状況や困難な状況を解決するための考え方等を含む心の姿勢も学んでいるものと考えた。

3-1-6 体験の理解と言葉について

概念図を導く過程で気づいたことであるが、1学期のカードは表現が比較的単調であり、まとめるのが容易であった。しかし、2

学期、3学期には、カードが多様な内容を含むようになり、1学期と同一の小見出しを持つまとまりの中に、新たな意味のまとまりが内包されるようになり、学びの広がりや深まりを感じさせた。このことから、体験の理解が進むと、受講生は学びの内容をよりの確に表現できるようになるのではないかと考えた。

3-2 概念図を俯瞰して

3-2-1 心技体の一致

今回は、データ収集の段階で「心」の学びと「体」の学びを別々に記述するよう求めた。概念図の上では、心の学びに関する記述を主として「心のあり方が変わった」というまとまりに、体の学びに関する記述を主として「身体的向上」、「剣道の技が身についた」というまとまりにそれぞれ整理したが、これらのまとまりの接点に位置する「自分を見つめた」、「他者から学んだ」、「心と体について考えた」に属する記述は、心、体、技術のいずれとも関連づけることができる内容であった。

たとえば、「自分を見つめた」では、「自分を大切にする」、「自分を客観的に見ることができるようになった」、「物事を深く考えるようになった」等の記述が見られた。また、「他者から学んだ」では、「待つ」、「見る」、「人に教を請う時の心構え」、「協調性」、「気配り」、「思いやり」等の記述がみられた。また、「心と体について考えた」では、「身体と心の一致」、「頭で考えるのも大切だが体に覚えさせることが大事」、「全身を使っている実感がある」、「一度身についた感覚はすぐに思い出せる」、「姿勢を意識するようになった」等の記述がみられ、特に「姿勢」に言及する記述は、心身いずれの「姿勢」を指すのか曖昧なものが多くみられた。

これらの記述はいずれも、心と体の両側面に関連するものにとらえられ、心技体の一致への言及と理解することもできた。しかし、

今回用いた調査および分析方法では、記述の背景等の詳細が不明であるため、曖昧な記述として概念図の中央(「心のあり方が変わった」、「身体的向上」、「剣道の技が身についた」の境界)に位置づけるに留めた。

3-2-2 剣道における心と体の学びについての仮説

ここまでの検討を踏まえて、本事例から見出された剣道における心と体の学びについての仮説を示す。

仮説1：剣道の授業を通して、「落ち着き」、「集中力」、「学ぶ姿勢」、「意欲」、「観察力」、「内省力」、「忍耐力」、「他者への配慮」、を中心とした「心のあり方の変化」が実感される。

仮説2：剣道の授業を通して、「健康観」、「姿勢」、「バランス・重心」、「調整力」、「感覚」を中心とした「身体的向上」が実感される。

仮説3：剣道の授業を通して、「型」、「動き方」、「基本動作」を中心とした「技術の習得」が実感される。

今後、これらの仮説を洗練し、検証していくことで、剣道授業の教育効果を明らかにす

ることができるものと思われる。

4. 終わりに

本報告の目的は、共通体育「剣道」受講生を事例として、大学での体育授業における心と体の学びの内容を検討することであった。

共通科目「体育」で「剣道」を受講した学生のうち88名のデータから、KJ法を参考とした手法によって学びの概念図を作成し、同時に考察を行った。一連の作業によって、「剣道」の受講によって「心のあり方の変化」、「身体的向上」、「技術の習得」に集約される学びが実感されるのではないかという仮説を提示した。

今回のような試みは、授業の意味を再確認し、新たな評価の観点を得ることにつながるワークとして、他の科目においても応用可能と思われる。

謝辞

本研究は、平成17年度体育センター教員拠出金による研究補助金を受けて行われたプロジェクト研究(研究代表・鍋山隆弘)の一部です。大学体育の実践現場から問題を発見し、掘り下げて考える機会をお与えくださいましたことに、心から感謝申し上げます。